

ブリティッシュ・アイデンティティの起源と

ジェラルド・オブ・ウェールズ

ロンドン大学ユニバシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)史学科

1997年9月提出 M.A.論文の要約

The Genesis of British Identity and the Case of Gerald of Wales

桜井俊彰

This is a version summarized in Japanese of an M.A. Dissertation titled 'The Genesis of British Identity and The Case of Gerald of Wales' submitted to the Department of History, University College London (University of London), in September 1997. This dissertation focuses on the early stage of the Normans' assimilation with the native people of Britain, by tracing the way which Gerald of Wales came to identify himself with the Welsh.

Gerald was a well-educated ecclesiastic of the twelfth century who belonged to a Norman family. He was also a person of mixed Norman and Welsh blood. Originally Gerald did not doubt his promotion in the ecclesiastical world. However, he was never trusted by the majority of the people who were of pure Norman blood in England court. He was looked down and bullied due to his Welsh blood. Promotion eluded him. Ultimately

Gerald acquired Welsh identity during his second bishopric election of St. David's because of these attacks and claimed to ecclesiastical independence for Wales. All in all his case is of great interest in the question of Norman assimilation and the formation of British identity.

This dissertation is in two parts. The first part is focused on Gerald's historical background, and the second is an analysis of his growing identity with the Welsh by concentrating on his two battles of bishopric election of St. David's.

Key Words: British identity, assimilation, bishopric election, St. David's
Toshiaki Sakurai

序論

12世紀、ノルマンの征服よりほぼ百年が経過した頃、ブリテン島の征服者であるノルマン人は大きな迷いを抱き始めていた。即ち、自分たちは未だに厳然たる征服者なのか、あるいはブリテン島土着の人々との徐々なる融合の結果、自分たちはもはやこの地に同化・統合された住民ともいうべき存在なのか、といったアイデンティティ上の問題である。例えばイングランドでは、ノルマン人たちはウォルセオフ (Waltheof, ?-1076) の「奇跡」を信じるようになっていた。ウォルセオフはブリテン島の被征服民アングロ・サクソンであり、ノーサンブリア伯であった。彼は征服王ウィリアム1世に忠誠を誓っていたが、やがてノルマン人が起こした反乱に巻き込まれる。その反乱が鎮圧された後、彼は反逆者としてこの反乱のただ一人の処刑者となる。ウォルセオフの遺体は彼にゆかりのリンカン州クロウランド (Crowland) の僧院に引き取られる。が、程なく遺体が腐らないという噂が流れ始め、やがて彼の眠る僧院はイングランド各地から、奇跡の力で癒されたいと願う巡礼が大挙訪れるようになる。この、ウォルセオフの墓参りをするアングロ・サクソンたちを、当初ノルマン人は軽蔑するだけだった。しかし、12世紀の中頃になるとノルマン人の態度が変わる。彼らもウォルセオフの墓詣でを盛んに行うようになる¹。

もう一例あげてみよう。1066年のノルマンの征服から国王ヘンリー2世の治世初年の1154年まで、イングランドの国王たちには、**French** と呼びかける家臣と、**English** と呼びかける家臣の2種類があった。**French** はイングランドに住んでいる貴族 (ノルマン人) に対してであり、**English** はイングランドに住んでいる貴族以外の一般の人々 (アングロ・サクソン) に対して使われた言葉である。この慣習は、しかし1154年以降変化する。つまりこの年より、**English** は貴族であろうが平民であろうが、イングランドに住んでいる者を指すようになり、**French** はフランスに住んでいる者全てを意味するようになった²。12世

紀には征服者ノルマン人と被征服者であるブリテン島土着の人々との間に、徐々なる同化が起こり始めていたのである。

こうした現象はウェールズでも始まっており、本稿で取り上げるジェラルド・オブ・ウェールズという人物を通じて、ウェールズにおけるノルマン人とブリテン島のネイティブであるウェールズ人の同化の先駆けともいえる事例を知ることができる。ジェラルド・オブ・ウェールズとは何者なのか。彼は様々な側面を合わせ持つ人間だったといえる。第1に、ジェラルドは12世紀当時、稀にみる高い教養を身に付けた聖職者だった。当時、学問や芸術においてヨーロッパの中心地だったパリで学んだジェラルドは、聖職者としても、国家の官吏としても申し分のない豊かな知識を身につけていた。第2に、ジェラルドは、イングランドからウェールズへ侵攻し、そこに定住したノルマン・マーチャー(Marcher)たち、いわゆるノルマン辺境侯の一族だった。第3に、ジェラルドはウェールズ人の血が4分の1流れる混血のノルマン人だった。彼は征服者階級の間人として、ウェールズ人を見下す一方で、ウェールズの王族につながる母方の血には強いプライドを抱いていた。こうしたジェラルドの生い立ち、とりわけ彼に流れるウェールズの血は、彼の人生の重要な節目ごとに政敵から差別や攻撃を招く要因になっていく。あるときはイングランド宮廷から、あるときはカンタベリー大司教によって、ジェラルドは激しく侮辱され、傷ついていく。当代一流の知識人でありながら、ウェールズの血の故に、ジェラルドはイングランド王宮を占める純粋なノルマンの血を保つ者たちから信頼されることはなかった。やがて、こういった「苛め」が原因となってジェラルドは自分をウェールズ人だと認識するに至る。

つまりジェラルド・オブ・ウェールズの事例は、征服者ノルマン人の被征服者であるブリテン島の住民への同化という問題と、ノルマン人のブリテン島の住民としての自覚、ブリティッシュ・アイデンティティの形成というテーマについて、その起源を提起する一つのケースと考えられる。本稿は、ジェラルドが自身をノルマン人ではなくブリテン島のネイティブであると認識するに至る経過を追うことにより、ブリティッシュ・アイデンティティの起源についての考察を試みるものである。本稿は2部構成である。第1部はジェラルドの歴史的背景について考察するもので、ジェラルドの人間形成に大きな影響があったと考えられる南西ウェールズのマーチャー社会について焦点をあてる。第2部は、ジェラルドのウェールズ人意識獲得過程を、彼が生涯で2度立候補した教会セント・デーヴィッツの司教選挙を取り上げながら分析する。

第1部 ジェラルドの歴史的背景

1-1 ノルマンのウェールズ侵攻

ジェラルド・オブ・ウェールズ (Gerald of Wales, ラテン語で *Giraldus Cambrensis*, フランス語で *Giraldas de Barri*, 1146–1223) は、ウェールズのペンブローク州 (Pembrokeshire)、マノービア (Manorbier) で生まれた。ペンブローク州を含む南西ウェールズ一帯は、古くからあるウェールズの王国の名前をとってダヴェッド (Dyfed) と呼ばれてきた。この南西ウェールズは、イングランド国王の度々の介入によって、ノルマン人とウェールズ人の関係が複雑な状態になっていた地である。この中で成長したジェラルドは、この地の状況を反映するように、あるときは自分のマーチャー一族のスポークスマンのように振る舞い、またあるときはイングランド王室の忠実な役人として行動し、そして最後には一人の熱烈なるウェールズ人として登場してくるのである。

この南西ウェールズの地の複雑な状況を理解するには、マーチャー社会がいかにしてこの地に形成されたかを知る必要がある。従ってノルマン人のウェールズへの侵入がまず明らかにされなければならない。この場合銘記すべきは、ノルマン人のウェールズへの侵入は、イングランド国王の命でなされたイングランドの「国家政策」ではなく、マーチャーたちの領土欲に基づく私的な侵略だったことである。少なくとも 1282 年のエドワード 1 世のウェールズ征服までは、イングランドの国家的な侵略とはいいい難い。イングランドでは国王に頭を抑えられていた一部の野心的なノルマン人にとって、西の地ウェールズは満たされない領土欲を晴らす新天地であり、ゆえに、ノルマン人のウェールズ侵入は、そこに領主権を確立するための利益第一の純軍事的なものであり、彼らは全ウェールズの征服という政治的次元の目的を描いていたわけではない³。

一方、イングランド国王側は、ウェールズに介入する積極的な意図はさほどなかったように思われる。初期アンジュー朝のイングランド国王たちにとっては、ウェールズのようなブリテン島の隅で起こっている出来事は、所詮副次的な問題にすぎず⁴、彼らはもっぱら大陸の広大なアンジュービン帝国の維持経営に注意を向けていた。例えば、ヘンリー 2 世 (在位: 1154–1189) は 35 年における治世のうちで、イングランドにいたのはその 3 分の 1 にも満たない 10 年そこそこに過ぎない⁵。とはいえ、国王たちはウェールズに対する関心を放棄していたのではない。必要に応じて、国王たちはウェールズ人の反乱鎮圧のために大軍を率いてウェールズに侵攻したり、マーチャーたちの領土的野心を見過ごせないと感じたときには、彼らを牽制しにウェールズやアイルランドまで遠征した。そしてまさにこのことが、ジェラルドとの関係の上で大きな意味を持つてくる。というのも、イングランド国王によって抑えつけられたマーチャーの中に、ジェラルドの一族がいた。この事実は、後にジェラルドが抱くようになる反イングランド感情の、そもそもの形成要因ともなっていく。

ノルマン人は 1087 年の征服王ウィリアム 1 世の死の直後からウェールズに侵入し始めた。彼らの侵攻ルートは、主に 3 つあるとされる。まず、イングランド中西部のシュローズベリーを拠点にもつアーヌルフ・オブ・モントゴメリー (Arnulf of Montgomery) がウェールズの北部から侵入する。他方、イングランド西部のヘレフォードからは、ベルナルド・ド・ヌフマルシェ (Bernard de Neufmarche) がウェールズの東の境より侵攻する。そして、南の境界からはロベルト・フィッツ・ハモ (Robert fitz Hamo) が入ってくる。

北部から入ったアーヌルフは西に向かって進軍し、カーディガン湾に達する。そこから彼のノルマン人部隊はウェールズの王国の一つであるケレディギオン (Ceredigion) を抜け、ペンブロークに至ると、そこに城を築き都市を建設する。こうしてできたペンブローク城の城主がジェラルド・オブ・ウィンザー (Gerald of Windsor) で、彼こそジェラルド・オブ・ウェールズの母方の祖父に当たる人物である。「武官ジェラルド、当城の警備の任を与えられし者」⁶ とウェールズの年代記である *Brut y Tywysogyon* は記している。ジェラルド・オブ・ウィンザーはまた、ウェールズ人のネスト (Nest) と結婚したノルマン人として知られている。ネストはその美貌からトロイのヘレンにちなんで「ウェールズのヘレン」とも讃えられた女性で、ダヴェッドの君主フリース・アプ・テウドゥール (Rhys ap Tewdwr) の娘である。つまりネストはジェラルド・オブ・ウェールズの母方の祖母であり、フリース・アプ・テウドゥールは曾祖父になる⁷。この南西ウェールズの地において、ペンブロークは征服者ノルマン人のシンボルとなる。他方、ヘレフォードからウェールズ東部に侵入してきたベルナルドは、1093 年にアベルホンジー (Aberhonddu) に到達する。この地でフリース・アプ・テウドゥールはノルマン人によって殺される。彼の殺害は、かつてウィリアム征服王がウェールズ人と結んだ友好的な協定の終焉を意味していた。ベルナルドはこのアベルホンジーに城を築くと、地名をノルマン風にブレコン (Brecon) と改める。

こうしたノルマン人の侵入の結果、ウェールズにはノルマン辺境侯の領主権マーチャー・ロードシップ (Marcher Lordship) が確立されていく。とはいえ、これは侵入してきたノルマン人が作った全く新しい概念の領主権ではない。ノルマン人はウェールズ人を統治するにあたり、自分たちが征服した地に根付いていたもの、例えば土着のウェールズ人にとって親しみのある地域の慣習、伝統といったものを使っていた⁸。ノルマン人のこういった取り込みの才の巧みさ、溶け込みのうまさをも、彼らは「カメレオン」⁹と形容されたりする。しかし、ウェールズ土着の習慣や権威を採用することは、単なる擬態と見るよりは土着の人々に接近するための征服者としての能動的意図と捉えるべきだろう。征服

者というものは被征服者の敵意の中に、ずっとあぐらをかいていられるものではない。征服した土地に定住できるか否かは、結局のところいかに征服者が被征服者の敵意を和らげていくかにかかっている。

こういう観点から、ノルマン人とウェールズ人の結婚も、ノルマン人の征服地域への安定した定住のための重要な政策だったと考えられ、マーチャーやその一族は、ウェールズ人との婚姻を進めていった。前述のジェラルド・オブ・ウィンザーとネストの例は、ノルマン人とウェールズ人の婚姻の中でも、最も注目すべきものの一つであるのは疑いない。そして、両者の結婚によって出現した新しい世代は、ちょうどジェラルド・オブ・ウェールズの例のように征服者ノルマン人と被征服者ウェールズ人の同化への、大きなステップとなる。

1-2 ウェールズ人の反攻

しかし、婚姻による同化が進む一方で、マーチャーたちのウェールズ定住へのプロセスは、全体として見れば非常な困難を伴った。まず、ノルマンのイングランドに対する迅速かつ壊滅的な侵攻に比べ、ウェールズへのそれはゆっくりと、限定された地域にのみ行われたものだった。このことはノルマン人に対してどう戦えばいいかを考える十分な時間を、ウェールズ人に与えることになった。さらに、ノルマン人たちは人員や物資の補充が基本的にできなかったため、彼らが占領した地を完全に、永久に確保しておくのに極めて不利だった¹⁰。なぜ補充ができなかったのかといえば、先に触れたようにノルマン人のウェールズ侵攻が、イングランドの国家政策ではなく、マーチャーたちの私的な領土欲からなされたからである。こうした侵入者ノルマンの弱点は、例えば1135年のヘンリー1世の死の直後に起こったウェールズ人の大規模な反乱を導く要因になっていく。ウェールズは侵略されたが、完全に征服されたのではなかった。ノルマン人たちは高地や山岳地帯でウェールズ人を打ち負かすことはできなかった。なぜなら、そういった場所ではノルマン伝統の騎兵戦術は用をなさなかったからである。ウェールズ人の戦い方について、ジェラルド・オブ・ウェールズは次のように記している。

ウェールズ兵は平原での戦いとか、あるいは整然とした戦闘隊形で戦ったときは、さほど輝ける存在ではない。しかし奇襲攻撃とか夜襲では、彼らは敵をさんざんに悩ます。一つの戦闘でウェールズ兵を打ち負かすのはたやすい。だが、長丁場の戦争となると彼らを屈服させるのは困難だ。彼らは飢えや寒さに十分に耐え、戦いで疲弊するとは思えない。戦況が不利なときも熱い心を失わず、たとえ一つの戦闘に負けようとも再び戦う心構えができています。そしてより激しい戦闘へ、もう一度立ち向かうのだ¹¹。

いわばウェールズ人は、山岳ゲリラ戦に長けた「12世紀のグルカ兵」¹² だった。彼らは蜂起のチャンスを待っていたのであり、ヘンリー1世の死はその引き金になったともいえる。ヘンリー1世はイングランドの王権を認めさせるためにしばしばウェールズに遠征し、ウェールズ人との間にある種の安定状態を確保していた¹³。だが、この国王の死後ひと月を待たずして南ウェールズに反乱が起き、ウェールズ人は急速に領土を奪い返していく。そして1136年には、ダヴェッドの大部分を奪還する。加えてステューベン王在位中の王位をめぐるイングランド内戦も、ノルマン人勢力を衰退させるのに一役買っていた。ウェールズの反乱勢力は北ウェールズのグイネズ (Gwynedd) の君主、オワイン・グイネズ (Owain Gwynedd) の下さらに強化され、失地回復が進んでいく。やがて当初は中立を保っていたダヴェッドのグリフィズ・アプ・フリース (Gruffydd ap Rhys, フリース・アプ・テウドゥールの孫でジェラルド・オブ・ウェールズの血縁者) も、反ノルマンのウェールズ大連合に加わっていく。このグリフィズ・アプ・フリースは、一般にロード・フリース (Lord Rhys、以後ロード・フリースで統一) と呼ばれ、オワイン・グイネズの死 (1170) の後、全ウェールズのリーダーとなっていく。1135年にはダヴェッドの大部分がノルマン人の手中にあった。しかし、1172年にはノルマン人はペンブロークとその周辺の孤立した地を持つだけとなり、あとはロード・フリースの手中に帰していた¹⁴。

このように、ジェラルド・オブ・ウェールズが生まれた時代は、侵略されたウェールズ人が勢力を取り戻しつつあった時であり、ジェラルドの幼年時代はノルマン人とウェールズ人の度重なる衝突が起こっていた。例えばジェラルドの少年の頃のある夜、自分が住むマノービアの隣町テンビーをロード・フリースが率いたウェールズ人が急襲した。ジェラルドは、その夜のマノービアの町に突如鳴り響いた敵の急襲を知らせる激しい鐘の音や、男達が武器を取ってマノービア城に急いだことなどを書き記している¹⁵。ジェラルドが生きていたのは、立ち上がったウェールズ人によって劣勢に立ったマーチャーたちが、必死にもがいていた時代だった。そして、彼らは勢力を挽回するために、当然ながら忠誠の対象である彼らの国王をあてにした。だが、マーチャーの庇護者でもあるイングランド国王は、皮肉なことに彼らにとっては諸刃の剣でもあった。

1-3 ヘンリー2世とマーチャー

イングランド国王のヘンリー2世は、当初ウェールズ介入に乗り気でなかったとされる。また、概して初期アンジュー朝の国王たちは、イングランドの王権がウェールズにおいてほぼ承認されているということをもって満足していた¹⁶。しかし、実際にはヘンリー2世はウェールズに都合4回遠征している¹⁷。これら遠征の目的は、イングランド内戦の間にウェールズから衰退していたイン

グランド王権を、再びウェールズ人に認めさせることにあった。だからウェールズ人に押されているマーチャーたちを助けるという問題は飽くまでも副次的なものとする。しかし一説によれば、ヘンリー2世はマーチャーたちに「借り」があったのだという。彼はイングランド王位をめぐるスティーブンとの内戦でマーチャーたちに応援を求め、彼らの力もあって戦いを有利に進められたのだという見方がある¹⁸。彼の遠征は、それゆえ昔の借りを返すためという一面もあったのかもしれない。とはいえ、ヘンリー2世はマーチャーたちが以前の領地を取り戻し力を回復するのを決して快く思っていなかったものとみられる。

そのヘンリー2世の対ウェールズ策は2段階に分けられる。彼の治世の最初の10年間は、主に軍事的な遠征に費やされ、マーチャーたちにとってみればウェールズ人の反抗によって失った土地の回復を大いに期待させるものだった。しかし、ヘンリー2世の態度は1164年に行われた4回目のウェールズ遠征が失敗してから、劇的な変化をみせる。この遠征は、1163年イングランドのウッドストックで開かれた会談で、ウェールズ君主身分の事実上の停止をイングランド側から要求されたことが原因となって起きたウェールズ人の大規模な反乱を鎮圧するために行われたものである¹⁹。過去のいずれと比べてもこの遠征は大規模で、ヘンリー2世はアンジュー帝国の全ての地域から兵の動員をかけている。ウェールズの年代記、*Brut y Tywysogyon* は語る。「スコットランド、イングランド、ノルマンディ、フランドル、ガスコーニュ、アンジューと、帝国各地からかつてないほどの兵力が集められた。彼は、ウェールズ人を根絶やしにしようと思いながらこの大遠征軍を率いてオズウエストリーにやって来た」²⁰。しかしヘンリー2世の遠征軍がディー渓谷 (Dee valley) に進軍してきたとき、「凄まじい風と雨を伴った大嵐が襲い、イングランド軍の身動きを取れなくさせ、そのうちに食糧も尽きてしまった」²¹。遠征軍は予想もしなかった夏の嵐に痛めつけられ、壊滅状態になってしまう。

この失敗はヘンリー2世に、ウェールズを武力で押さえることの困難さを悟らせたと思像するのに難くない。同時に、マーチャーたちの領地回復要求に耳を傾けることがいかに無意味なのかを思い知らせるのに十分だったろう。1164年以降、イングランドとウェールズとの間にできあがった新たな平和的關係を打ち破る恐れのあるマーチャーたちの動きに対して、ヘンリー2世が常時目を光らせるようになったのも、自ずと理解できる。こうしたヘンリー2世の、対ウェールズ政策の劇的な転換を裏付ける例として、1171年のウェールズを通過地として実施されたアイルランド遠征がある。この遠征はウェールズ側の了解、つまりロード・フリースの承認を得て行われたものであり、マーチャーたちのアイルランドにおける領地獲得欲を抑えつけ、彼らをイングランド国王の厳し

い監視下に留めておこするものだった²²。そこには、アイルランドにまで侵入し始めたマーチャーたちと、現地アイルランド人との混血によって形成されつつある、半ばイングランドから独立状態のノルマン-アイリッシュ勢力の台頭を芽のうちに摘んでおこうという明確な意図があったとされている²³。

しかし他方でマーチャーたちにとっては、イングランド国王のこのような動きは、理不尽な介入として映った。それも当然で、ウェールズ人の反攻が開始されてからというもの、マーチャーたちは国王にずっと支援を求めていたからである。そもそも1167年以降、マーチャーたちがアイルランドに侵入し始めた最大の理由は、ウェールズ人の反攻で失った土地を回復してほしいという度重なる彼らの要求に対し、イングランド国王が何ら有効な軍事的支援をしなかったからだった²⁴。マーチャーたちが助けを求めたとき、国王は何もしなかった。それならばと、再び力を盛り返すべく新天地アイルランドに向かったところ、逆に国王に頭を抑えつけられてしまった。当然、一部のマーチャーたちに国王不信の感情が大きく育ちつつあったのは疑いようもない。そうした、ウェールズに見切りをつけアイルランドに進出して行ったマーチャーの中に、ジェラルド・オブ・ウェールズの一族の者が少なからずいた。

以上が、ウェールズに侵攻し、そこに定住していったノルマン人たちの概略である。ジェラルドの父や祖父たち、そしてジェラルド自身もこうした、マーチャーやイングランド国王の利害が頻繁に対立した時代を生きていた。そしてその両者がお互いを牽制するために、ウェールズ側としばしば同盟すらした。ジェラルドはこれらマーチャー、イングランド国王、そしてウェールズの3勢力のいずれにも深い繋がりを持つ一人のキー・パーソンとしてこの時代に登場してくるのである。従ってこの特徴的な人物の出自と、彼を育んだマーチャーの社会をより詳しく探るために、ジェラルドの出生の地であるダヴェッドに焦点を当てて、そこでのノルマン人定住の状況を次に追ってみたい。

1-4 ジェラルドのルーツ

ダヴェッドは1093年、侵攻してきたシュローズベリー伯のロジャー・オブ・モントゴメリーとその息子アーヌルフ・オブ・モントゴメリーにより急襲されている。*Brut y Tywysogyon* は、彼らノルマンの迅速な襲来をこう語っている。「フランス人たちはダヴェッドとケレディギオンを一気に制圧した。そして、これらの占領地に城を建て、町々を城塞化した」²⁵。これらの城の一つが、ロジャーの息子アーヌルフがダヴェッド南部に建てたペンブローック城で、アーヌルフはペンブローック最初のノルマン人領主となった。しかしこうしてダヴェッドに出現したノルマンの植民社会は極めて不安定な状況の中にあった。1096年以降始まったウェールズ人の周期的な反撃は、これらノルマンの占領地域の新住

民に心休まる暇を与えなかったとっていいだろう。ウッドストックの破談直後の大規模反乱以降、ウェールズの各地の土着の支配者たちは、次第に互いに連携して侵入者ノルマン人に強力な反撃戦を展開していく。その結果、唯一ペンブロークとその周辺だけがウェールズ人に対して、ノルマン人が攻勢に出られる砦となって残ったのである²⁶。ウェールズにおける大多数のノルマン人住民と同じように、ダヴェッドのノルマン人も彼らのホーム・ランドであるイングランドから補充人員を迎えることができなかった。彼らは、自分たちのいまいる勢力で自分たちを守るしかなく²⁷、従って彼らのリーダーであるアーヌルフを頼らざるを得なかったのである。だがそのアーヌルフは、ウェールズ人の攻勢の前に有効な手立てを打つことができず、ダヴェッドのおびたしい領地を失い、1102年ペンブロークから逃亡してしまう。この時以来ペンブロークは、数次の遠征でウェールズにイングランド王権を浸透させたことで知られるヘンリー1世よるイングランド王室直接支配領に組み入れられることになる。ジェラルド・オブ・ウェールズの母方の祖父で、アーヌルフの副官だったジェラルド・オブ・ウィンザーが、アーヌルフの逃亡の後、ヘンリー1世によってペンブローク城の城主に任命されたのは、まさにこの時のことである。

ジェラルド・オブ・ウィンザーは、この時代の鍵を握る重要な人物だといえる。彼は、ウィリアム征服王が任命したウィンザー城の城主だったウォルター・フィッツ・オザー (Walter fitz Other) の息子であり、ノルマンの名門フィッツジェラルド家の始祖でもある²⁸。ジェラルド・オブ・ウィンザーはペンブローク城を改修し、そこに「すべての財産と、妻と、子供たちと、親しき人たちを留めおいた。深い壕と、高い城壁と太い門のかかった頑丈な門とで、彼はその城を頑強に固めていた」²⁹ ののである。彼は大変な戦術家だったともいわれており、孫ジェラルド・オブ・ウェールズは、この祖父に関する興味深いエピソードを記録に留めている。それは、1096年のウェールズ人の大反乱のときのことであり、そのときペンブローク城はウェールズの大軍に包囲されていた。

包囲は長期間にわたって続き、城に立てこもる兵士は忍耐の限界に達しようとしていた。場内の食糧がほとんど底を尽いたとき、ジェラルドは、まだ食糧がたっぷりあるかのような印象を敵に持たせるために一計を案じた…彼は四匹の豚を引いてくると一実際はそれが城内の食糧の全てなのだが一 それらを解体し、分けた肉の塊を城壁から敵に投げつけた…彼はまた、さらに巧妙な策を思いついた。彼は部下に自分の署名入りの手紙を持たせて城を脱出させ、それをウィルフレッドのとある宿の外にわざと落とさせた…この手紙が味方へ急ぐジェラルドの兵から偶然落ちたように思わせるためである。手紙には援軍はいら

ない、城内の食糧は豊富で兵の士気もすこぶる盛んであると書かれていた…これを読んだウェールズ側は即座に城の包囲を解き、撤収した³⁰。

このような知略に長けた人間がペンブローク城の城主としてイングランド国王から厚い信任を得ていたことは想像に難くない。すでに述べたように、このジェラルド・オブ・ウィンザーはフリース・オブ・テウドゥールの娘ネストと結婚する。そしてこの2人からはこの時代のマーチャーたちの動向を特徴づける、ある重要なノルマン・ウェルッシュの混血ファミリーが、歴史に登場してくる。ジェラルド・オブ・ウィンザーとネストには4人の子供が生まれた。ウィリアム・フィッツ・ジェラルド、モリス・フィッツ・ジェラルド、デーヴィッド・フィッツ・ジェラルド、そしてアングハラードである。この4兄弟の中にあってデーヴィッド・フィッツ・ジェラルドは、第2部で見えていくことになるセント・デーヴィッツの司教になり、甥のジェラルド・オブ・ウェールズに大きな影響を与える。4兄弟中唯一の女子アングハラードは3人の子供を産んだ。マノービアの領主となるフィリップと、ロバート、そしてジェラルド・オブ・ウェールズである。これに加えてジェラルドにはもう一人の叔父、ロバート・フィッツ・スティーブンがいた。ネストがジェラルド・オブ・ウィンザーと結婚する前の夫、カーディガンの城主だったスティーブンとの間にもうけた子である。このロバート・フィッツ・スティーブンとジェラルド家 (the fitz Geraldts) からジェラルド・オブ・ウェールズの2の兄、ロバートとフィリップ、そして叔父であるウィリアム・フィッツ・ジェラルドを始祖とするカル一家 (the Carews) の全ての者が、新天地を求めアイルランドに渡って行ったのだった³¹。そして、彼らのアイルランドにおける勢力回復の野望は、国王ヘンリー2世の介入によって遮られることになる。

ともあれここにみてきたように、ジェラルド・オブ・ウィンザーは、ウェールズのみならずアイルランドまで広がっていった混血勢力ノルマン-ウェルッシュの、一つの太い源流と捉えることができよう。ジェラルド・オブ・ウィンザーとネストによって確立された血統は、ペンブロークのノルマン人社会の中で多大な影響力を保持する一方、ウェールズ土着のダヴェッドの王族にも繋がっていたのである。そして、このことはジェラルド・オブ・ウィンザーとネストの子孫たちに、ある深刻な問題を提起することになる。それは、後にジェラルド・オブ・ウェールズが陥った、自分はノルマン人なのかウェールズ人なのかという、アイデンティティ上の葛藤だった。

一方、ジェラルド・オブ・ウェールズの父方の系譜は、母方の系統にくらべかなり不明瞭である。そもそも、ダヴェッドの多くのノルマン人ファミリーは、ノルマン人あるいはフランドル人領主たちの随員としてウェールズに渡ってき

た者たち、つまり封土をもたない騎士とか、地方領主の末弟とかいった人々をそのルーツにもつとされている。明らかなことは、オド・ド・バリ (Odd de Barri) という名の一人のノルマン騎士が、南ウェールズの海岸線に沿って移動し、最後にマノービアの城主になったということだ。この男の息子がウィリアム・ド・バリ (William de Barri) で、アングハラードと結婚した人物、つまりジェラルド・オブ・ウェールズの父である³²。ジェラルド・オブ・ウェールズはウェールズ人の血が4分の1流れる混血児だった。

1-5 ハイブリッド社会のダヴェッド

さて、ダヴェッドではノルマン人以外の入植者も多数存在していた。そういった非ノルマン人グループの一つに、フランドル人入植者がある。彼らはペンブローク州の南部において、他の入植者グループとはひととき違った非常に活力にあふれたコミュニティーを形成していた³³。この、フランドル人のウェールズ移住の原因は、従来彼らの郷土であるフランドルの天災に起因するものとされてきたが、詳しくはわかっていない。少なくともいい得ることは、フランドル人は恐らく 1107 年から 1111 年の間にヘンリー 1 世の指示で移ってきたということだ³⁴。 *Brut y Tywysogyon* にはこの間の事情が次のように記されている。

その人々はブリテンの海の向こうにあるフランドルの地からやって来た。あるとき海がその地を覆い尽くし、砂が大地一面に広がってしまった。そのためそこは不毛の地になってしまった…それゆえその人々は国王ヘンリーのもとに、彼らが生活できる新たな地を懇願しにやって来た。そこでヘンリーはその人々を Rhos (フロース、ペンブロークの西の地) に送った³⁵。 (括弧は著者)

フランドル人はまた、旺盛な闘争心を持っていたといわれており、同時に商人としても、あるいは農民としても優れた適性を発揮したらしい。何でもやらなければならない新天地における入植者の条件を兼ね備えていたといえる。ジェラルド・オブ・ウェールズはフランドル人に関して次のように語っている。

フランドル人は勇敢で頑健であり、ウェールズ人に対しては激しい敵意を持ち、絶え間のない闘争状態の中にあつた。彼らはウール貿易にととも長け、陸にいようと海にいようと利益の追求のためには必死で働き、危険に立ち向かう用意が常にできている。彼らは臨機応変に手に持つものをたちまちのうちに剣に変えたり、鋤に変えたりする³⁶。

フランドル人入植者は、イングランド国庫に州長官を通して税を収める義務を負っていた。その見返りに、彼らはイングランド国王の厚い保護下に置かれていた。そしてまさにこの事実は、第2部で見るようにジェラルドが 1174 年にセント・デーヴィッツの教区において聖職者としてのキャリアをスタートさせ

たとき、フランドル人との間に、ある衝突を起こさせるのである。この他、ダヴェッドにはイングリッシュ（アングロ・サクソン）やノルマン人の混血のアングローノルマン、ジェラルド・オブ・ウェールズのようなノルマンとウェールズ人の混血であるノルマン-ウェルッシュ、そしてウェールズ人といった人々が混在していた。中でも人数的に一番多かったのはイングリッシュであり、彼らはダヴェッドで主に兵士や農民といった階層を構成していた。彼らイングリッシュは、ブリストル海峡の向こう側のイングランド南西部から、彼らの領主と共にウェールズにやってきたものと考えられている³⁷。

こういった植民の結果、ペンブロークに出現した社会は「フランドル人とフランス人とサクソン人」³⁸のハイブリッド社会だった。人々や言語、方言、慣習の多様性はペンブロークの著しい特徴であり、そこでは同一地域に住む様々な人々によって、例えばノルマン人はフランス語、イングリッシュは英語、フランドル人はフランドル語、ウェールズ人はウェールズ語を話し、バイリンガルさえ稀ではなく、ジェラルド・オブ・ウェールズの長兄のフィリップはフランドル語を解せたという³⁹。加えて、ラテン語が宗教上の、また学問上の言語として使われていた。教養を究めた一人の聖職者であり、フランス語を自身の母語とし、ラテン語を職業上の言語としたジェラルドが、12世紀の英国史の表舞台に登場してくる背景には、このような南西ウェールズ、ダヴェッドの渾然としたハイブリッド社会があった。

以上が、12世紀の知識人を代表する優秀なる聖職者であり、ノルマン騎士とウェールズ王族の血統を持つ混血の人物としての、ジェラルド・オブ・ウェールズの歴史的背景である。こういった出自のジェラルドは、彼の人生のある地点までは、勢いあふれる征服者ノルマンの、マーチャー・ファミリーの一員として、多くのノルマン人と同様にブリテン島土着のイングリッシュやウェールズ人を軽蔑し続ける。一方で、彼は自分に流れる高貴なウェールズの血を強調したりもする。だが、そんなジェラルドは、やがてウェールズ人としてのアイデンティティを抱くに至る劇的な人生の転換点に立つ。それは、セント・デーヴィッツの2度目の司教選挙にジェラルドが立候補したときだった。

第2部 ジェラルドのウェールズ人への同化

2-1 意識変化：第1段階（1183年ごろまで）

ウェールズ人およびイングランド王室に対するジェラルド・オブ・ウェールズの意識の変遷過程は、大きく3段階に分けられる。第1段階はジェラルドがウェールズ人に何の親近感も、イングランド王室に対する何の反感も抱いていなかった時期であり、ジェラルドの最初のアイルランド行き直前の1183年頃（ジェラルド30歳前後）まで続く。第2段階は1183年から1194年までの間

であり、ウェールズ人に対する親近感は第1段階同様ないが、イングランド側に対するある種の反感が膨らんでいく時期である。第3段階は、ジェラルドがウェールズ人に強い共感を抱くと同時に、イングランド側に対する激しい反感を持つに至る間で、この劇的な段階は1194年前後に始まり1203年に終わる。

まず第1段階だが、この期間はジェラルドにとって多彩な出来事を内包している。ジェラルドの最初のパリ訪問(1165-1174)、ジェラルドが計画し主導的役割を担ったセント・デーヴィッツの教区における教会改革運動の推進(1174-1176)、そしてジェラルドのセント・デーヴィッツの司教選への最初の立候補(1176)といった事柄である。ジェラルドは幼少の頃より信仰心の厚い子供だったらしく、彼の幼い兄たちが砂場で城を作っているとき、「教会や修道院作りに夢中になっている」⁴⁰ ような子供だったらしい。彼の父は幼いジェラルドのことを「私のビショップ」⁴¹ と呼んだという。ジェラルドはそんな父親や、母方の叔父で1148年にセント・デーヴィッツの司教になるデーヴッド・フィッツジェラルドのもとで、ひとかどの教会人となるための勉強を進める。

18歳で初めて訪れ、勉強のために滞在することになったパリは、一人の若き教会人としてのジェラルドに多大な影響を与えずにはおかなかった。12世紀後半におけるパリとボローニャは、ヨーロッパにおける学問の中心であり、パリで行われた教育は多様性にあふれ、いずれも洗練されていた。このパリでジェラルドは世俗、教会の両世界にわたる法律を学ぶのだが、当時国家の官吏として採用されることを目指す者にとって、これらを選択することは至極当然のこととされていた⁴²。つまり、ここにジェラルドのイングランド王宮内での出世を目指す意図を窺い知ることができる。ジェラルドはパリで神学者や法学者と深く交わることになる。中でも、当時パリを代表する法律の権威ピーター・ザ・チャンター(Peter the Chanter)と師弟関係をもったことは、パリから帰国後セント・デーヴィッツの教区で実践に移すことになるジェラルドの教会改革の考えを形成する上で、多大の影響力を及ぼしたといわれる。

彼の教会改革の考えは2つの柱より成っていた。1つは聖職者のモラル改革であり、もう1つは世俗の支配や干渉から、教会が完全なる独立を達成することにあった。前者は聖職者の性モラルの乱れに対する倫理改革である。当時は聖職者が1人のみならず複数の内妻を抱えることはありふれた現象だった。また後者は、人々に畏敬されるべき対象として、教会の高い威厳を確立することであった。とりわけジェラルドは、司教選挙といった聖職界の行事は、国王だろうと干渉を許すべきではない、つまり司教選挙の世俗からの完全なる自由を強調した⁴³。もともと、ジェラルドのこの教会改革の考え自体は後述の、やがて彼が強く抱くことになるウェールズの教会的独立の思想とは直接の関係はない。

しかしジェラルドの教会改革にかける鋭い姿勢は、彼を後にフランドル人との衝突に導いていく。そしてそれは、イングランド王室側がジェラルドに対する反感を育てていくきっかけにもなっていく。

1174年にパリから戻ってきたジェラルドは、ダヴェッドにあるセント・デーヴィッツの教区でカンタベリー大司教リチャード (Richard of Dover、在位：1173-84) の理解のもと、若き改革者として教会人のキャリアを積み始めることになる。まず、彼は教会の財源となる十分の一税の支払いの徹底を推進する。この税は、この地特産のウールやチーズに課せられたものだが、ノルマン人のウェールズ侵入の混乱で支払われなくなっていた。ジェラルドはこの十分の一税を復活させようと強く試みるのだが、当然反発は大きく、わけてもフランドル人は頑強に拒否する。なぜかといえば、第1部で述べたように、フランドル人はイングランド国王直々の政策で入植してきたというプライドがあり、彼らにとってみれば国王以外に税を払う義務はない、ということになる。ジェラルドは職務を遂行する際はいつも厳しい態度で臨んだといわれており、時には中世最強の精神的武器とされる「破門」を脅しに使い、また自分が所属するノルマン一族の武力行使を警告として用いながら、その教会改革運動を実行に移していったとされる⁴⁴。このようなことからジェラルドとフランドル人との間に深刻な対立、衝突がおきたのは間違いのないところであり、フランドル人住民を通じてイングランド国王は彼らのジェラルドに対する誹謗・中傷を聞いたであろうことは想像に難くない。

ジェラルドは、1175年には、セント・デーヴィッツの司教である叔父のデーヴィッドによって、ノルマン人がブレコンと改名したウェールズ南東部の町の大執事に任命される。大執事は司教を補佐する重要な役職であり、ジェラルドはこのときまだ21歳であったから、当時の一般例と比べても異例ともいえる出世の早さだった。このことはダヴェッドでのノルマン・マーチャーの *kin* の絆が、いかに地域社会に強い影響力を保持していたかをよく物語っている⁴⁵。教会改革を進める上でも、教会人としての栄達をはかる上でも、ジェラルドが、最大限に自分の *kin* の力を利用していることがこのことからよくわかる。ジェラルドの後ろ盾であった叔父のデーヴィッドは、1176年に没し、セント・デーヴィッツの司教の座は空席となる。ジェラルドはこのとき、叔父の後継者になる決心を固め、かくして彼の最初のセント・デーヴィッツ司教選挙の闘いが始まるのだが、ここであらかじめ確認しておきたいことは、ジェラルドがセント・デーヴィッツの大司教区問題 (*metropolitan issue*) を当初から主張していたわけではないということである。この大司教区問題を、ジェラルドが彼にとっての第1回目のセント・デーヴィッツの司教選挙のときから主張していたため、

ヘンリー2世に疎まれて司教任命を拒否されてしまったのだとは、しばしば語られるところだ。だが、これは誇張であり、大司教区問題を持ち出したのはセント・デーヴィッツの僧たちよりなる聖堂参事会員であったという。そのほとんどがウェールズ人で構成されるセント・デーヴィッツの僧たちは、1176年の春にロンドンのウエストミンスター寺院で開かれた教会会議(synod)でこの問題を提起したのであり、この会議へジェラルドが出席していたかどうかは、疑わしいとされている⁴⁶。少なくともジェラルドは第1回目の司教選の時点では、セント・デーヴィッツの大司教区問題に関してさほど熱心ではなかったようである。では、この大司教区問題とは何なのか。これは本論を進める上で避けて通れない重要な内容を含んでいるので、その概要ここで紹介したい。

2-2 ベルナルドと大司教区問題

セント・デーヴィッツの大司教区問題を最初に提起した人物は、司教ベルナルド(Bernard, 1115-1147)である。ベルナルドはセント・デーヴィッツの最初のノルマン人司教で、ジェラルドの叔父、デーヴィッド・フィッツ・ジェラルドの前任者にあたる。ベルナルドは、自身がウェールズの大司教の地位につくことを主張した。彼によれば、ウェールズはキリスト教初期の段階から大司教を擁していた地であり、セント・デーヴィッツはその総本山だった。それゆえ、ウェールズはカンタベリーの支配に従属することなく、教会的独立を達成するにふさわしいと説いた。ベルナルドの主張は、ウェールズに古くから存在する教会の独立に関する伝説に立脚している。中でも彼に大きな影響を与えたのが *The Life of David* という物語である。これは1090年頃ウェールズ人の Rhygyfarch of Llŷnadarn という人物が著したもので、セント・デーヴィッツに葬られ、教会の名前にもなっている聖デーヴィッドを始めとした、ウェールズにおけるキリスト教初期の頃の聖人伝をまとめたものである。注意したいのは、この *The Life of David* によれば、聖デーヴィッドはウェールズにおける最初の大司教となっているのだが、これはベルナルドの主張とは違う。ベルナルドは、前述のごとくキリスト教が入ってきた初期の段階からウェールズには多くの大司教がいたとしている⁴⁷。恐らく、ベルナルドは自分の主張を有利に導くための戦術として、こういう変更をしたのだろう。

それでは、ベルナルドが主張するように、実際にウェールズがかつては大司教を擁していた地であって、その本拠地がセント・デーヴィッツだったのだろうか。結論からいえばこれは全く定かではない。この問題について手に入り得る記録・情報の全ては、*The Life of David* といったような、信頼性が極めて疑わしい古いウェールズの伝説や記録類でしかない。また、ベルナルドが活用したわけではないが、この問題に関して記述のあるものの一つに、ジェフリー・

オブ・モンマス(Geoffrey of Monmouth, ?-1155)が著した *The History of the Kings of Britain* という書物がある。史料としての信頼性は *The Life of David* 同様二の次にして、同書によればブリテン島にはロンドンとヨークのほかに、ウェールズのカイルレオンと、3つの大司教区があった。そしてカイルレオンの最初の司教に任命されたのはダヴリグ Dyfrig (6世紀始めの聖職者とされる) である。そして、ダヴリグが隠者になるため大司教を辞めたとき、聖デーヴィッドがその後を継いで大司教になった。同書によれば聖デーヴィッドはかのアーサー王の叔父とされ、この聖デーヴィッドの死んだ地はカイルレオンの西のメニヴィア Menivia にある彼の修道院(後のセント・デーヴィッツ)だったが、彼の地位はあくまでもカイルレオンの大司教であった。*The History of the Kings of Britain* によれば、ここでアーサー王物語でお馴染みのマーリーンが登場し、こう予言する。メニヴィアはカイルレオンのパリュム (pallium) で覆われるだろうと。パリュムとは教皇が大司教にその印として授ける白い帯のことである。だから、マーリーンの予言はメニヴィアが大司教のいる総本山になることを意味するわけである。*The History of the Kings of Britain* のこの部分は、その後のセント・デーヴィッツ大司教区復活運動の闘士たちの主張の根拠となっていく。例えばジェラルド・オブ・ウェールズも後にここを論拠に、ウェールズの大司教区の本拠地をセント・デーヴィッツに移したのは聖デーヴィッドだったと主張している⁴⁸。ともあれ、ウェールズにその昔イングランドと同じように大司教区が置かれ、セント・デーヴィッツがその本拠地だったという点に関しては、今日それらを確認するに足る信頼性のある史料は、以上見てきたようにはない。しかしベルナルドやジェラルドが生きていた時代は、カンタベリーと闘うのにこれで十分だったのである。ベルナルドは、セント・デーヴィッツに大司教区を確立すべく教皇に手紙を書き続ける。のみならず、自ら2度ローマに出向いてさえいる。教皇エウゲニウス3世は、ベルナルドの主張に好意的であったとされ、これに対し、ベルナルドの主張が通ればウェールズの教会勢力を一挙に失うことになるカンタベリー大司教テオバルド (Theobald) は、ベルナルドに敵対した。テオバルドのベルナルドに対する攻撃は極めて明快で、ある一点を徹底して教皇に訴えた。それは、ベルナルドを司教に叙任したのはカンタベリー大司教であり、このことはベルナルド自身カンタベリーへの服従を認めていることに他ならないというものである⁴⁹。

最終的に教皇エウゲニウス3世はテオバルドあての1147年6月29日付けの手紙で、ある決定を表明した(この手紙については、その写しを後にジェラルド・オブ・ウェールズがローマの教皇庁の記録庫で発見し、またそのオリジナルをセント・デーヴィッツで見つけることになる⁵⁰)。手紙には、翌年の1148年

にランスで開かれる教皇庁の会議でこの問題は決着されるであろうと記されていた。しかし肝心のベルナルドが翌年を待たずして急死してしまい、この問題はそれきり沙汰止みになってしまう。ベルナルドの後継者としてセント・デーヴィッツの司教になったジェラルドの叔父のデーヴィッド・フィッツ・ジェラルドと、セント・デーヴィッツの全ての聖職者は、これ以降2度と大司教区問題を持ち出さないようにとカンタベリー大司教テオバルドに強く命じられる⁵¹。以上がセント・デーヴィッツの大司教区問題の概略だが、それにしてもベルナルドとジェラルド・オブ・ウェールズを比較してみると感慨は尽きない。ベルナルドがカンタベリーと闘ったように、その半世紀後、今度はジェラルドが自身の2度目のセント・デーヴィッツ司教選のとき、この大司教区問題を掲げて闘う。そして、テオバルドと同じように手強くしたたかなカンタベリー大司教ヒューバート・ウォルター (Hubert Walter) と、これまた教皇を巻き込んだ熱き闘いを演じる。まさに「歴史は繰り返す」の観があるが、このときの、ジェラルドにとって第1回目のセント・デーヴィッツ司教選のときは、まだ彼はこの問題に関心がなかった。

確認するなら、ジェラルドの最初の司教選立候補は、大司教区復活を目指してセント・デーヴィッツのカンタベリーからの教会的独立を果たすという考えからではなく、教会改革者としての情熱に基づいたものだった。それはこのときのジェラルドの立候補が、カンタベリー大司教リチャードに支持されていたことからも知ることができる⁵²。ジェラルドの立候補がイングランド国王ヘンリー2世の下に上程されてきたとき、リチャードはジェラルドの改革にかける意気込みや勇気、学識の高さ、ロード・フリースにつながる高貴な出自などを国王に好意的に伝えたと言われる⁵³。しかし、ジェラルドの司教への任命は国王ヘンリー2世によって拒否された。ジェラルドを薦めるリチャードに、ヘンリー2世は次のように答えたといわれている。

正直に過ぎ、気負いあふれる人間をセント・デーヴィッツの司教にすることは、国王にとっても（カンタベリー）大司教にとっても必要でもなければ得策でもない。イングランドの玉座と（カンタベリー）大司教の座が、そのことによって喪失してしまわないためにも⁵⁴。

(括弧は著者)

ヘンリー2世はまた、ごく親しい者たちに内緒で次のように漏らしていたともいわれる。

あの執事（ジェラルドのこと）を *Mynyw*（マニウ、セント・デーヴィッツのこと）の司教に据えるのは危険である。なぜなら彼は南ウェールズの王フリースの血族であると同時に、ほとんどのウェール

ズの名門と繋がっている。だから、このような実直で高い出自の者を昇進させると、ウェールズ人に新たな力と誇りを与えることになり、我々の得にはならない⁵⁵。(括弧は著者)

結局のところ、ジェラルドはその体に流れるウェールズの血によって、キャリアの最初の段階からイングランド王室にとって危険な人物と見なされていたことがわかる。ジェラルド1人だけが、まだこのことに気がついていなかった。それは当然なのかもしれない。いくら1176年の最初のセント・デーヴィッツの司教選に失敗したとはいえ、彼はこの時点でまだ30歳の若さである。教会人として、前途洋々たる野心を抱いていたに違いない。

この後ジェラルドは再びパリに渡り(1176-79)、戻ってくるとセント・デーヴィッツの教区でピーター・ド・ライア(Peter de Leia)の補佐役として活動を始める。ピーターはジェラルドに代わりヘンリー2世によってセント・デーヴィッツの司教に任命された人物である。この、補佐役をしていた期間(1179-83)で重要なのは、ジェラルドに対するイングランド王室の反感が、次第に募ってきたことだ。教会改革を断行するジェラルドへのフランドル人の強い反発が、ヘンリー2世のジェラルドに対する印象を害した可能性はすでに見た。そのことは、ジェラルドの司教就任に対する拒否権発動に結びついた理由の一つでもあっただろう。だが、このピーター・ド・ライアのジェラルドへの悪口は、イングランド王宮中にはるかに大きな影響を与えたのは確かである。彼はジェラルドと組んで仕事を始めたときからずっとジェラルドに敵対的であり、ヘンリー2世や王宮の重臣たちに対し、ロード・フリースにつながるウェールズの血筋の故をもって、ジェラルドの背信性を一貫して警告し続けたのである。まとめるなら、この第1段階では最初のセント・デーヴィッツ司教選での失敗はあったものの、ジェラルドの中にイングランド王室に対する特別な反感は芽生えてはいない。イングランド側が彼への警戒心を募らせ始めていたにもかかわらず、ジェラルドは自分の将来的成功を疑ってはいない。しかし、こういったジェラルドの姿勢は、次の第2段階で転換を余儀なくされる。

2-3 意識変化：第2段階(1183-94)

第2段階は、ジェラルドのイングランド側への反感が次第に成長してくる時期である。わけても1190年以降は彼の対イングランド感情に大きな転換がある。しかし一方で、ウェールズ人に対する彼の親近感はこの時期まだ顕著に育っていない。この時期の大きな出来事は、ジェラルドがイングランド王室の役人として仕えることになったことだ。セント・デーヴィッツの教区でピーター・ド・ライアの補佐役をしていたジェラルドは、1183年にヘンリー2世によってイングランド王宮に召喚され、1194年にその任を辞している。ジェラルドがこの王

室付きの官吏に召された理由として2つの事柄があげられよう。1つは、ジェラルドのウェールズにおける広範な知識と人間関係が、イングランド王室の政策を彼の地に実施する上で極めて有益だという点だ。このことは一方で、ジェラルドをイングランド側のウェールズ封じ込め政策に必然的に巻き込んでしまうことを意味するわけだが、ジェラルドはそうした政策の遂行に意欲的であったとされている⁵⁶。後に述べるが、1185年の王子ジョンとのアイルランド行、そして数次に渡るウェールズ行、特に1185年のカンタベリー大司教ボードウィン (Baldwin) や、1192年のシトー修道士ウィリアム・ウィベルト(William Wibert) を伴ったウェールズ行は、ジェラルドがイングランド王室のこうした対外政策を熱心に推進していたことを物語っている。ジェラルドはこれらの活動中にウェールズ人に親近感をほとんど示していない。彼はこういった、国王から命じられた仕事を首尾よく成し遂げることで、イングランド王宮内により深く取り入り、立身出世を遂げる道を探していたと考えられる。ここに、ジェラルドが王室の官吏になった第2の理由がある。

では、ジェラルドは官吏になることで何を目指したのか。それは、イングランドの地で司教になることだったと思われる⁵⁷。彼が国王の側近の一人になろうとしたのは、この願望を成就させるためだったとみていいだろう。というのも、当時、国王は身近な取り巻きの中から、司教を指名していたことがよくあったからである⁵⁸。この、イングランドで司教になるという野心がジェラルドにあったからこそ、次の事態の真相も見えてくる。それはジェラルドがジョンの司教の座を与えるという申し出を、4度も断ったことである。ジョンは1186年に2度、アイルランドのウェックスフォード (Wexford) とリーリン (Leighlin) を、1190年にも2度、ウェールズのバンゴール (Bangor) とサンダヴ (Llandaf) の司教の座をジェラルドに与えようとした。だが、いずれもジェラルドは辞退した。この拒否の理由については、いくら最初の司教選には失敗したとはいえ、ジェラルドは飽くまでもセント・デーヴィッツの司教になることに大きなこだわりを持っていたからだと思われがちである。だが実際はそうではなく、ジェラルドの関心はイングランドで司教になることに向けられていたと考えられるのである。なるほど、セント・デーヴィッツは、ジェラルドにとって、叔父のデーヴィッドを通じて子供の頃から深い繋がりをもった特別な教会だった。しかし、ジェラルドはこの段階ではまだ、唯一セント・デーヴィッツの司教になるという絞り込みはしていないといい。要するにこの第2段階でのジェラルドの関心は、専らイングランドに向けられていたと考えられる⁵⁹。

ところで、この第2段階は、ジェラルドのイングランド王室に対する感情の変化、あるいはジェラルドのウェールズ人に対する考え方を探る上で鍵になる